

介護実習Ⅱにおける介護過程の展開

～介護実習における介護過程の理解度を検証する～

鍋島恵美子, 光野裕美子, 馬場由美子, 小川智子

(西九州大学短期大学部 生活福祉学科)

(平成 23 年 12 月 22 日受理)

Deployment of the Care Process in Care Training II ～ I inspect an understanding degree of the Care Process in the Care Training ～

Emiko NABESHIMA, Yumiko MITUNO, Yumiko BABA, Tomoko OGAWA

(*Department of Life Welfare, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted December 22, 2011)

Abstract

Due to the curriculum revision in 2009, the subject of “Care Process” was adopted as an independent module which requires 150 hours. The subject of “Care Process” is considered to explore the basis of care and engages students with the process of thinking about achieving the goals of care. In “Care Training”, students are required to collect information, clarify problems, make care plans, and evaluate the care process. Our school requires 60 hours and 90 hours for “Care Training II” for first year and second year respectively. Second year students explore the care process through “Care Training”. Recently, the second year students completed “Care Training II”, and each student recorded a summary of the care work practice. We assessed students’ levels of understanding the care process through questionnaires. We argue that care work education including care work practice and “the care work process” should be based on the collected data which student recorded and questionnaires.

Key words : Care process 介護過程
Care training 介護実習
Assessment アセスメント
Care plan creation 介護計画作成
Evaluation 評価

1. はじめに

介護福祉士の養成は、2009（平成21）年度より新カリキュラムになり、介護領域の科目群に新たに介護過程150時間が設定された。介護過程とは、実践する「介護」の根拠を明らかにし、介護の目標を達成するための専門性に基づいた思考過程であり、改正前は介護概論（60時間）や介護実習指導の中で教えていた。しかし、新たに科目として導入されたことは、介護福祉士教育において、介護の専門性を確立するため、最も重要ととらえているからであろう。

厚生労働省は、介護過程の教育のねらいとして「他の科目で学習した知識や技術を統合して介護過程を展開し、介護計画を立案して適切な介護サービスの提供ができる能力を養う学習とする。」また、教育に含むべき事項として「介護過程の意義と展開、介護過程とチームアプローチ、介護過程の実践的展開」、想定される教育内容の例等、基本的な枠組みを示した。さらに、これまで介護実習指導で教えていた介護実習の事前指導・事後指導は、介護総合演習の科目で教えるようになった。この科目は「実習の教育効果を上げるため、実習に必要な知識や技術、介護過程の展開の能力等について、個別の学習到達状況に応じた総合的な学習とする」とし、介護実習については、介護実習Ⅰと介護実習Ⅱに分け、介護実習Ⅱにおいて、「利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価、これを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を総合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得する」としている。

本学では、介護実習Ⅱにおいて介護過程を実際に展開するために、介護過程と介護総合演習の授業を担当する教員が連携を図りながら教育しているが、情報収集からアセスメント、介護計画作成、評価に関して学生がどれくらい理解し実践ができていないか、介護過程の理解度・実践力を把握し、今後の介護過程や介護総合演習の教育に活用したいと考えた。そこで、介護過程の授業に関するアンケート調査や、介護実習Ⅱの総括として「介護実習Ⅱのまとめ」を学生に作成させ、報告会を実施し、この報告会には1年生も参加させて、その結果を検証することとした。

2. 方 法

- (1) 介護過程の理解に関するアンケート調査（2年生48名）
- (2) 介護実習Ⅱにおける振り返り調査の実施（2年生43名）
- (3) 介護実習Ⅱに向けてのアンケート調査（1年生32名）
- (4) 厚生労働省ホームページ「介護福祉士養成課程にお

ける教育内容等の見直しについて」

(5) 文献

3. 倫理的配慮

学生に対し、アンケート調査を行うに際し、授業効果を上げるための調査が目的であり、個人を特定するものではなく、調査結果は研究目的以外には使用しないこと、調査は自由意志によるものであることを口頭で説明し、了解を得た。

4. 結果と考察

(1) 介護過程の授業に関するアンケート調査について

新カリキュラムになり介護過程の授業が150時間となり、ICFの考え方、アセスメントの方法、施設・在宅のサービス事業所における介護計画の作成、チームワークの重要性等に関して、理論や演習を多く取り入れた学習が展開できるようになった。本学では、介護過程Ⅰ（30時間）では、介護過程の意義・目的及び利用者を理解するための講義・演習、介護過程Ⅱ（30時間）では、ICFについて講義・演習、及び介護実習Ⅱに備え、事例を用いて情報収集からアセスメント、介護計画の作成の演習、介護過程Ⅲ（60時間）では、訪問介護、通所介護、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、障害者支援施設における介護過程の展開について、外部講師と学科の教員が事例を用いて講義・演習を行い、介護過程Ⅳ（30時間）では、チームワーク、ケアマネジメント、在宅・施設における介護計画等の講義・演習を行っている。これらの学習内容を介護実習Ⅱでどれくらい実践できているかどうか、介護過程の展開手順ごとに理解度や実践の状況をアンケート調査した。（資料1）2年生49人中43名の回答があった。その結果は下記のとおりである。

なお、2年生で行う介護実習Ⅱについては、7月上旬の1週間の実習で担当利用者を決め情報収集を行い、情報収集した担当利用者を、介護総合演習の授業時に担当教員の指導の下に、アセスメント、介護目標の設定、介護計画の作成までを行い、8月中旬から9月上旬までの夏休み期間中の4週間実習で、担当利用者に変化はないかどうか、必要に応じ情報収集からアセスメント・介護計画を見直し、施設実習指導者より指導を受けて、介護計画の実践・評価を行うように指導している。

1) 担当利用者決めと情報収集について

利用者の全体像を理解するためには情報収集は必須である。図—1の①で示すように担当利用者を決めるにあたっては、利用者との関わりが少ない学生が自身で決めるのは難しいと思われる。多くの学生が指導者と相談の上決めている。図—1の②の「情報収集は上手くできたか」については、2割弱の学生が、情報収集が「上手く

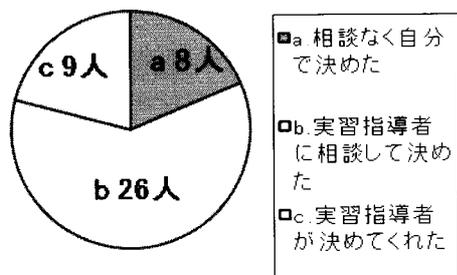


図-1 ①担当者の決定について

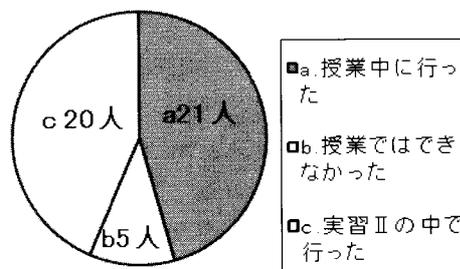


図-2 ①課題分析（ニーズの把握）

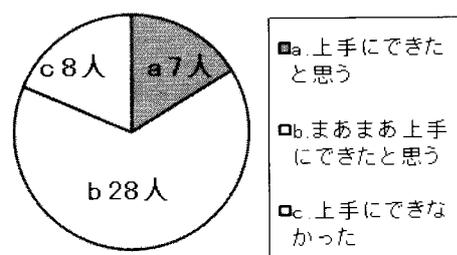


図-1 ②情報収集は上手にできたか

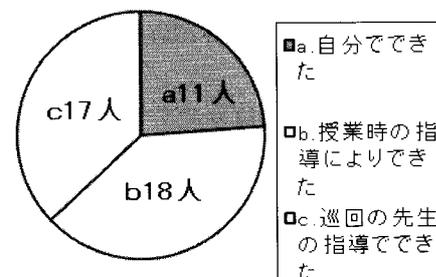


図-2 ②課題分析の実際

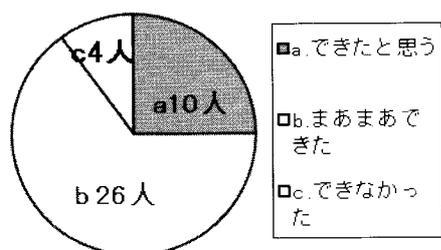


図-1 ③利用者の思いを把握できたか

約7割の学生は、図-2の②で示すように課題分析は、授業時や巡回教員の指導を受けてできている。課題分析は介護計画作成の土台となるのでとても重要であり、教員や施設実習指導者の指導が必要であることがうかがえた。課題分析の難しかった点については、「担当利用者が本当に必要としているニーズを把握することが難しい、利用者の過去にとらわれ過ぎた、利用者・家族の思いに相違する点があった」等の意見があった。

できなかった」と回答しており、その理由としては、「コミュニケーションがうまくとれなかった、担当利用者を決めるのに時間かかり過ぎた」等、介護実習Ⅱの調査とほぼ同じ内容であった。その他として「利用者の性格上の問題」という答えもあったが、「利用者の性格上の問題」と回答している学生については、利用者に対する理解が不十分であり、施設実習指導者や巡回教員にもっと積極的に指導を受けるべきだったのではないかと考える。

図-1の③の「利用者の思いを把握できたか」の問いには、ほとんどの学生が「できた」「まあまあできた」と答えている。ICFの視点や利用者本位の介護計画作成の大切さを介護過程の授業の中で何度も話すので、利用者を主体とした介護計画の作成の重要性については、認識できているのではないかと考える。

3) 介護計画の立案

図-3①の介護計画作成にあたっては、授業時には「できなかった」と回答した学生が5割以上であり、その理由については、「情報収集が間に合わなかった、課題分析に時間がかかった」等であった。

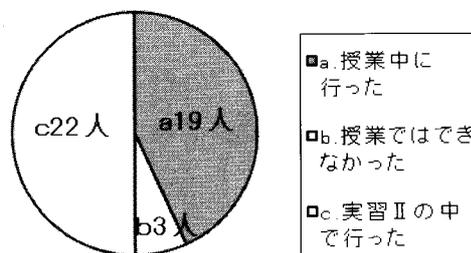
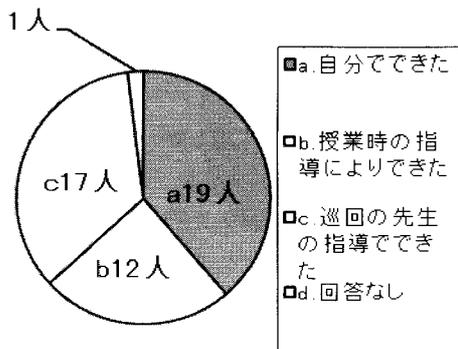


図-3 ①介護計画はどこで立案したか

2) アセスメント

図-2の①の「情報収集した後、介護総合演習の授業で課題分析（アセスメント）ができたか」の問いについては、「できなかった」が5割以上であった。できなかった理由としては、「担当利用者を決めるのが遅かったり情報収集が間に合わず不十分であったりしたため」の理由が多かった。



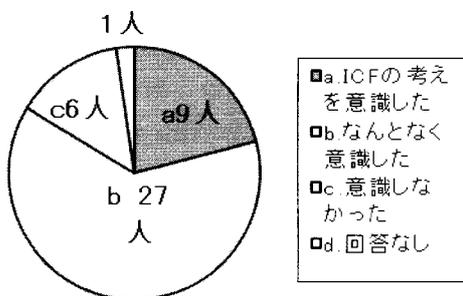
図一3 ②介護計画は自分でできたか

図一3②の「介護計画は自分でできたか」については、課題分析に比べると5割以上は授業時や巡回時に指導を受け作成している。課題分析と介護計画立案の指導は重なる部分が多いからではなかろうかと推測される。介護計画の立案で難しかった点に対する回答としては、「本人の承諾を得ることができなかった、リハビリ等の専門になってしまった、計画内容は頭にあったがどう表現していか分からなかった、担当利用者に関わる時間が短かった、利用者・家族のニーズをとらえられているか不安だった」等の意見があった。

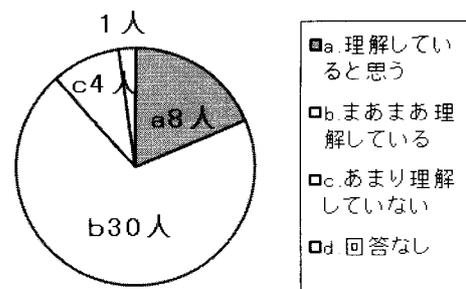
4) ICF の理解

図一4①の介護計画を立案する際、「ICFを意識して立てたか」については、「なんとなく意識した」「意識した」の回答が多かった。

また、図一4②の「ICFを理解しているか」という問いには、「まあまあ理解している」「理解している」の回答が多く、利用者の意欲やプラスの部分の活用、隠れている能力を引き出すことの大切さ等、ICFの視点が学生になんとかではあるが浸透していることがうかがえた。



図一4 ①ICFを意識して計画を立てたか

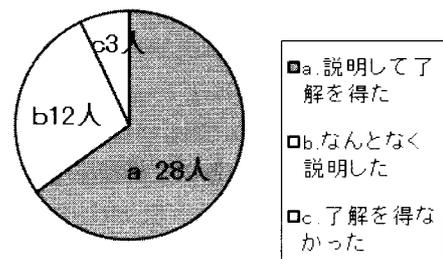


図一4 ②ICFを理解しているか

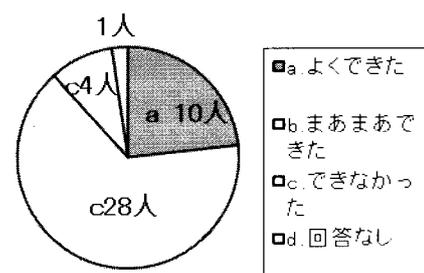
5) 介護計画の実施

図一5①の「介護計画を実施する際、利用者の理解を得たか」については、「得なかった」と回答した学生が3人いたが、その理由として「理解を得るべきだという意識が欠けていた、利用者の性格上の問題、重症心身の利用者のため意思疎通が難しかった」と回答している。

図一5②の介護計画の実施は、ほとんどの学生は「できた」と答えているが、できなかったと答えた学生は1割弱であり、その理由としては、「利用者の性格上の問題、寝込まれた」等と答えている。



図一5 ①利用者に理解を得たか



図一5 ②介護計画の実施

6) 介護過程の展開

全体をとおして「介護過程の展開が理解できたか」の質問に対し、ほとんどの学生が「理解できた」と回答しているが、1割弱(4人)が「あまり理解していない」と回答している。学生の基礎学力の低下や欠席する学生も必ず数名はおり、日々の学生の授業態度や介護に対する意識の低さ等が影響していると考えられる。

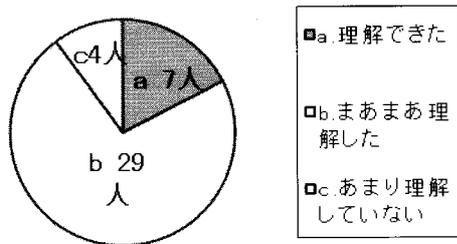


図-6 介護計画の展開

(2) 「介護実習Ⅱのまとめ」の概要・考察

介護実習Ⅱを終えた学生が介護福祉士として自己を客観視し、自己の課題を知り、介護福祉士としてのあるべき姿(介護観)をもつことができるようになるためにも、介護実習を振り返ることが必要であるため、総括として介護総合演習の教員の指導の下、個々の学生に「介護実習Ⅱのまとめ」(資料2)を記入させ、グループ毎にまとめた冊子を作成し報告会を実施した。

なお、生活福祉学科の介護実習Ⅰ・Ⅱの実習施設・事業所、実習期間は表-1のとおりである。

表-1 介護実習施設・事業所および実習期間

	実習施設種別	期間(時間)
介護実習Ⅰ 1年次	小規模の通所介護事業所	5日間(40時間)
	認知症グループホーム	5日間(40時間)
	・身体障害者支援施設 ・重症心身障害児(者)施設 ・救護施設 ・知的障害者更生施設 このうちから2ヶ所選ぶ	各5日間(80時間)
	介護老人保健施設	5日間(40時間)
	介護老人福祉施設	5日間(40時間)
	訪問介護事業所	2日間(16時間)
		計32日間(256時間)
介護実習Ⅱ 2年次	・介護老人福祉施設 ・介護老人保健施設 ・身体障害者支援施設 ・重症心身障害児(者)施設 ・救護施設 ・小規模の通所介護 このうちから1ヶ所選ぶ	
		計25日間(200時間)

介護実習Ⅰの目標は、「個別ケアの重要性を理解し、利用者及び家族とのコミュニケーションを実践する。また、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じたチームの一員としての介護福祉士の役割について理解する。」であり、介護実習Ⅱでは、「介護過程の展開を理解するために、以下の介護過程を実践すること。」としている。

- ① 受け持ち利用者を決め情報収集する。
- ② 情報を整理し生活課題を把握する。
- ③ 介護目標を設定し、介護計画を立案する。

- ④ 介護計画を実践する
- ⑤ 介護計画実践の評価・考察をする。

2年生48名が実習施設ごとにまとめた「介護実習Ⅱのまとめ」の結果・考察を概説する。

1) 実習前の自分自身の心構え

自由記載としたが、「積極的に行動する」「積極的に介護する」「積極的に関わる」等、「積極的」という言葉が目立った。学生は、積極的姿勢で実習を行うことが良い結果につながることを、1年生時に行った介護実習Ⅰの経験から学んでいることが推測できる。あるいは、実習先の指導者の実習評価の高低から、自分の課題として捉えているとも考えられる。他には、「介護計画の立案・実践できるようになる」という意見も多かった。これは、介護過程の展開における介護計画の作成・実施・評価が介護実習Ⅱの目標として掲げられているので当然のことといえる。注目したいのは、「利用者のより良い生活、より良い人生のための介護」、「利用者の尊厳やプライバシーへ配慮した関わりを心がける」、「利用者主体のコミュニケーションを行う」、「利用者のニーズにあった介護計画の立案」、「利用者の安全・安楽を第一に考える」、「利用者にあふれるような介護福祉士を目指す」等、「利用者主体」であることを意識している学生が多数存在するということである。介護実習は単位取得のため、あるいは自己成長のためと考える学生も少なからず存在すると思われるが、「利用者主体」を意識できる学生が多いということは、これまでの学習の成果や、介護実習を通して「介護福祉士として質の高いサービスを提供することが重要である」という専門職としての意識が芽生えたのではないかと推測する。

2) 介護計画作成

表-2 介護計画の作成

	項目	回答	人数
①	7月の実習で十分な情報収集ができたか	できた	20
		できなかった	27
②	8月の実習前に介護計画が立案できたか	できた	33
		できなかった	14
③	実習中に介護計画の見直しや修正はスムーズにできたか	スムーズにできた	28
		できなかった	19
④	介護計画の実施は、計画通りにできたか	できた	25
		できなかった	22
⑤	実習を通して施設の職員との人間関係は	良好	45
		良好とはいえない	2
⑥	実習に対する施設・職員の協力	得られた	46
		得られなかった	1

「7月の実習で十分な情報収集ができたか」については、表-2の①に示すとおり、「できた」「できなかった」

の大差はない。「できた」と回答した学生の多くは、利用者とのコミュニケーションをうまく図ることができたことに加え、職員からの情報提供や記録物の情報収集が可能だったことがその要因であろう。逆に「できなかった」と回答した学生は、その理由として「利用者本人から情報を聞き出すことが難しかった」「職員への聞き取りが不十分だった」に加え、「介護計画の対象利用者を決定するまでに時間がかかり、十分な情報収集を行うには時間が足らなかった」という学生が多く、また、「介護技術の習得と情報収集の両立ができなかった」「ご家族の了解をもらうまでに時間がかかった」という学生の意見もあった。このことから、情報収集は、学生の実習に対する意欲に加え、実習の方法や担当利用を決定し、情報収集するまでの過程が施設によって異なることがうかがえた。

「8月の実習前に介護計画が立案できたか」については、表-2の②に示すとおりである。7月の実習で情報収集ができなかった学生27名のうち13名は、8月の実習が始まるまでの間に何らかの方法で利用者の情報収集に成功し、介護計画の作成に至ったことがわかった。7月と8月の間は6週間ある。この間の介護総合演習授業の指導で、介護計画の立案に情報収集が欠かせないことをあらためて認識したのではないだろうか。また、クラスメイトの情報収集の内容(量)と自分の情報収集を比較し、情報収集の少なさを痛感して自主実習という形で不足した情報収集のため実習施設を訪問する学生も数名いた。これらの学生は、8月の実習前までに介護計画に対する意識が高まり、できるだけよい計画の立案・実践につなげるために積極的に行動したのだろう。「できなかった」と回答した学生は、そもそも7月の実習で担当利用者を決定することができず、情報収集不足を補わないまま8月の実習に臨んでいる。介護実習Ⅱにおける介護計画作成の意識の低さがうかがえる。

表-2の③の「実習中に介護計画の見直しや修正はスムーズにできたか」については、半数以上の学生が「スムーズにできた」と答えている。その要因の多くは、施設職員(実習指導担当者)からの指導や助言があったからと答えている。また、同じ施設で実習している学生や実習巡回の教員からのアドバイスによって、介護計画の見直しや修正を行った学生も多い。学生は助言によって視点を変えて考えることの大切さが理解できたようである。介護計画を作成し実践することにより、様々な場面での利用者の状態を観察することができるようになり、その状態に合わせて介護計画を見直した学生もいた。これらのことから、大半の学生が、「介護とは、その場その場の援助ではなく、情報収集や観察に基づいた根拠のある介護を行うことがいかに重要であるか」に気づくことができたと言えるのではないだろうか。「できなかった」

の理由としては、「間違った情報(ケースファイルの情報が過去のものだった)で作成してしまい、修正に十分な時間がとれなかった」や「利用者さんが体調を崩し、担当利用者の変更があったため」、「担当利用者さんに関わる時間が少なかった」等の意見があり、利用者側の事情等も関係していることがうかがえた。

3) 施設職員との人間関係や協力

表-2の⑤⑥に示すように、職員との人間関係や協力は、ほとんどの学生は「良好」「得られた」と回答している。実習施設・事業所の職員が実習生に対して理解を示し、実習しやすい環境を作っていたかと思われる。それに加え、本学の卒業生が実習担当者になっていることも少なくなく、先輩として後輩達の相談にのっていたかという意見もあった。介護過程の展開は、実習先の職員の協力があってこそ実施できる。介護実習Ⅱにおいては実習先の指導者は「介護実習指導者研修」が課せられるようになったが、このことも介護実習の理解に繋がっているのではなかろうか。「良好とはいえない」「得られなかった」と回答している学生は極僅かであり、学生側にも問題があると思われる。

4) 全体をとおして

報告会で感想として多くあがったのが、「積極性」「介護技術の習得」「体調管理」「コミュニケーション能力」の他、実習をとおして「笑顔」「礼儀」の基本的マナーが何より必要ということであった。対人援助の専門職である介護福祉士として、人として必要なマナーをベースに、専門的な知識・技術が必要であると気づいたことで、学生は「介護福祉士としてのあるべき姿」を改めて見直すことができたのではないかと考える。

(3) 介護実習Ⅱの報告会に参加した1年生の感想

介護実習Ⅱを控えている1年生の実習への意欲を高め、また、心構えを改めて認識させることから、2年生の報告会に参加させるようにした。参加した感想についてアンケート調査(資料3)を行い、32名から回答を得た。その結果は次のとおりである。

表-3の①の「報告会に参加して良かったか」では、半数以上の1年生が肯定的に評価している。その理由の多くは、今回の報告内容から多くの学生が「これまで知らなかった実習施設の細かな情報を得ることができた」「こころ構えを教えてもらい参考になった」等と回答しており、今後の介護実習への不安の軽減につながったのではないかと推測できる。

表-3の②の「今後の実習への意欲の高まり」でも半数以上の学生が意欲の向上を感じており、今回の報告会

表-3 介護実習Ⅱの報告会に参加した感想

項 目	回 答	人数
① 今回の報告会に出席して良かったと思うか。	良かった	21
	どちらでもない	11
	良くなかった	0
② これからの実習に対する意欲が高まったか。	高まった	19
	どちらでもない	10
	高まらなかった	1
③ 介護過程における介護計画の作成について関心が高まったか。	高まった	18
	どちらでもない	13
	高まらなかった	1
④ 介護実習に対する心構えに変化はあるか。	変化がある	19
	どちらでもない	11
	変化はない	2
⑤ 実習に対する心構え	自由記述	
⑥ 報告会全体の感想	自由記述	

が1年生の介護実習への意識に変化を与えていることが理解できる。

表-3の③「介護過程における介護計画の作成への関心」についても、半数以上の学生が「関心が高まった」と回答している。実際の介護計画の作成は2年生の介護実習Ⅱで実施するが、すでに介護過程の授業で事例を用いて演習している。今回2年生が実際実施した介護計画作成・実施・評価の過程を知ることができ、より現実的に今後の自分の課題として捉えることができたのではないだろうか。

表-3の④⑤の「実習に対する心構えに変化はあるか」については、約半数が「変化がある」と答えている。その内容としては「挨拶・礼儀・笑顔等基本的なマナーが大切」「積極的に利用者とコミュニケーションを図る」等、具体的な意見が多かった。2年生の反省内容や1年生へのアドバイス等がかなり影響していることが考えられる。2年生の実習体験を知ることによって介護実習に対してのイメージを明確にし、実習の態度について学生なりに考えることができたのではないかと思う。

表-3の⑥の「報告会全体の感想」では、ほとんどの学生が「とても参考になった」という意見だったが、中には「自分なりの介護でやろうと思った」「よく解らなかった」等の意見もあり、1年生のなかには、介護過程の展開について十分に理解していない学生も存在することも否めない。今回、介護実習Ⅱの報告会へ1年生も参加させたが、アンケート調査から、この報告会は1年生にとっても非常に有意義な学びの機会となっていることがうかがえた。これからも1年生も参加させるようにしたい。しかし、2年生の報告会に参加して逆に介護実習に対する緊張や不安が増した学生も少なからず存在することも推測できる。今後はそのような学生への指導も必要と考える。

5. まとめ

介護福祉士の資格が誕生して20余年が経過し、介護に関する制度や社会情勢も大きく変化している昨今、多様化したニーズに対応できる「質の高い介護」が求められており、質の高い介護福祉士の養成が急務となった。そこで、今回、介護福祉士養成のカリキュラムが大きく改正されたところであるが、質の高い介護とは、エビデンスに基づく介護が実践できることである。介護福祉士養成教育について、高橋は『介護福祉士養成教育課程においては、専門知識や技術の習得は勿論のこと、学生の更なる深化が求められることは、エビデンスに基づく介護福祉観の確立と職業倫理を基盤とする高次な人間性であり、その一助を担うのが「介護過程」と考える。演習としての事例研究や先人の生き方を通して「考える力」「感じる力」を養っていくことが、利用者理解や専門職としての人間性を涵養していくと考える。』¹¹⁾と述べている。介護過程を展開していく上で、利用者の思いを把握し、利用者の心身の状況についての的確に情報収集がいきるためには「観察力」すなわち「感じる力」「考える力」が必要となってくる。しかし、まだ人生経験の浅い学生にとって、利用者の生活の変化や心の痛み等を感じとり、共感することは容易なことではない。特に介護実習Ⅱにおいては1週間で担当利用者を決め情報収集を行うため、アンケート調査では5割以上が「できなかった」と答え次の実習前に自主的に情報収集を行っている。現在、本学では、学生が「考える力」「感じる力」を養うための教育方法として、グループワーク・ロールプレイ・体験学習・事例検討等、演習を多く取り入れ試行錯誤しながら授業を行っているが、さらに教育方法について創意工夫が必要と考える。

また、介護過程を実践するにあたっては、実習受入れ先の指導者は勿論のこと、職員全員の介護実習に対する理解と協力も必要であり、理解・協力がないと学生が介護現場で介護過程を実践することは困難である。介護実習Ⅱの指導者には指導者研修の受講が義務付けられ、実習内容に関する理解も深まりつつあるものの、実習生に対する対応や指導については実習施設によって異なる点も多く、特に介護過程の重要性についての認識は、介護福祉士養成校と介護現場ではまだまだ温度差があることは否めない。「短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究」²¹⁾によると、短期大学が重視する介護福祉の専門能力として「介護過程に関する知識・技術の育成」の項目について6割以上が「最も重視して取り組んでいる」と回答しており、介護福祉士養成校では介護過程を重要な科目として教育していることがうかがえる。一方介護現場ではどうだろうか。社団法人日本介護福祉士会の「第8回介護福祉士就労実態と専門性の意識に関する

調査報告書』によると、『専門性を発揮するために必要な介護過程の要となる「介護業務日誌の記入」や「施設内サービス担当者会議への参加」に関して専門性を感じている人は少ない』³⁾とある。介護施設における介護は、ケアマネジャーが作成したケアプランに基づき援助は展開されているが、さらに介護職として二次アセスメントを行い、介護計画を作成して介護を行う、いわゆる介護過程の展開が実践されている施設が少ないのではなからうか。このことも介護職員の介護過程に関する理解の低さの一因ではないかと考える。

今後、介護福祉士が専門職として社会的に評価を高めていくためには、介護過程に基づく介護実践が不可欠であり、介護福祉士養成校と介護現場が一体となり指導していくことが「質の高い介護福祉士」の養成に繋がるものと考えられる。本学では、年に1回「介護実習施設等との連絡協議会」を実施し情報交換を行っているが、さらに、介護福祉士養成校と介護現場の実習関係者の連携を強化していくための方策が必要であろう。

参考文献・資料

- 1) 高橋謙一：「質の高い介護」と「質の高い介護福祉士」に関する一考察 -介護福祉士法およびカリキュラム改正からの検証- 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要 (14), 73-78 (2009)
- 2) 佐藤弘毅：目白大学短期大学部「短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究」文部科学省 平成21-22先導的の大学改革推進委託事業 (2011)
- 3) 社団法人日本介護福祉士会「第8回介護福祉士就労実態と専門性の意識に関する調査報告書」(2009)
- 4) 介護福祉教育NO31 日本介護福祉教育学会 第16巻第2号(2011)
- 5) 西村洋子：介護福祉教育の展望—カリキュラム改正に臨み— 光生館 (2008)
- 6) 川廷宗之編：介護教育方法論 弘文堂 (2008)

(資料1)

介護実習Ⅱにおける介護過程の展開について

介護実習Ⅱでは介護過程を実際に展開されたと思います。振り返りとして皆さんのご意見をお聞きしたいので、下記にお答え下さい。

1. 担当利用者の情報収集

- ①担当利用者の決定について a 相談なく自分で決めた b 実習指導者に相談して決めた c 実習指導者が決めてくれた
- ②情報収集は上手にできたか a 上手にできたと思う b まあまあ上手にできた c 上手にできなかった
- Cのできなかった人はその理由を書いて下さい
- ③利用者の思いを把握できたか a できたと思う b まあまあできた c できなかった
- Cのできなかった人はその理由を書いて下さい

2. アセスメントについて

- ①課題分析(ニーズの把握)は a 授業時に行った b 授業ではできなかった c 実習Ⅱの中で行った
- bの授業でできなかった人はその理由を書いて下さい
- ②課題分析の実際 a 自分でできた b 授業時の指導によりできた c 巡回の先生の指導でできた
- 課題分析で難しかった点を書いて下さい。

3. 介護計画の立案

- ①介護計画の立案は a 授業時に行った b 授業ではできなかった c 実習Ⅱの中で行った
- bの授業でできなかった人はその理由を書いて下さい
- ②介護計画は a 自分でできた b 授業時の指導によりできた c 巡回の先生の指導でできた
- 介護計画の立案で難しかった点を書いて下さい。

4. 介護計画の実施

- ①実施に当って利用者に了解をえたか a 説明して了解を得た b なんとなく説明した c 了解を得なかった
- Cの了解をえなかった人はその理由を書いて下さい
- ②介護計画に実施は a よく理解できた b まあまあ理解できた c どちらともいえない
- d あまり理解できなかった e 理解できなかった
- ご意見：
- ⑥衣服の着脱の介助(講義と演習) a よく理解できた b まあまあ理解できた c どちらともいえない
- d あまり理解できなかった e 理解できなかった
- ご意見：
- ⑦食事の介助(講義と演習) a よく理解できた b まあまあ理解できた c どちらともいえない
- d あまり理解できなかった e 理解できなかった
- ご意見：
- ⑧介護過程の展開(演習) a よく理解できた b まあまあ理解できた c どちらともいえない
- d あまり理解できなかった e 理解できなかった
- ご意見：

(資料2)

介護実習Ⅱまとめ

1. 実習前の自分自身の心構え

--

2. 実習時間について

	日勤実習	早出実習 (有・無)	遅出実習 (有・無)	夜勤実習 (有・無)
時間帯	: ~ :	: ~ :	: ~ :	: ~ :
	昼休み	記録時間 (定期・不定期)	控え室の使用	ロッカーの使用
時間帯	: ~ :	: ~ :	有・無	有・無

3. 介護計画について

① 7月の実習で十分な情報収集ができたか

十分な情報収集	理由または、工夫したことなど
できた・できなかった	

② 8月の実習前に介護計画が立案できたか

介護計画の立案	理由または、工夫したことなど
できた・できなかった	

③ 実習中に介護計画の見直しや修正はスムーズにできたか

計画の見直し・修正	理由または、工夫したことなど
スムーズにできた	
できなかった	

④ 介護計画の実施は、計画通りにできたか

計画の実施	理由または、工夫したことなど
できた・できなかった	

4. 実習を通して

① 施設の職員さんとの人間関係

職員との人間関係	理由または、工夫したことなど
良好・良好とはいえない	

② 実習に対する施設・職員の協力

実習に対する協力	理由または、工夫したことなど
得られた・得られなかった	

5. 1年生へ実習の心構えなどについてメッセージ

--

6. 実習全体を通しての感想・心に残るエピソードなど

--

(資料3)

「介護実習Ⅱのまとめ」報告会についてのアンケート

先日行われた報告会について、以下の項目にお答えください。

なお、このアンケート結果は、今後の介護実習および介護過程における介護計画の作成に役立てていこうと考えています。あなたが感じたありのままをご記入ください。

1、今回の報告会に参加して、良かったと思いますか。

a	良かった	b	どちらでもない	c	良くなかった
---	------	---	---------	---	--------

2、1の解答の理由は何ですか。少し具体的にお答えください。

--

3、今回の報告を聞いて、これからの実習に対する意欲は高まりましたか。

a	高まった	b	どちらでもない	c	高まらなかった
---	------	---	---------	---	---------

4、今回の報告を聞いて、介護過程における介護計画の作成について関心が高まりましたか。

a	高まった	b	どちらでもない	c	高まらなかった
---	------	---	---------	---	---------

5、今回の報告を聞いて、介護実習に対する心構えに変化はありますか。

a	変化がある	b	どちらでもない	c	変化はない
---	-------	---	---------	---	-------

6、あなたの実習に対する心構えを書いてください。

--

7、今回の報告および報告会全体の感想を書いてください（印象に残った内容、気づきなど）。

--

ご協力ありがとうございました。